

ギリシア文化の西欧伝播とビザンツ＝後ウマイヤ朝関係

竹 部 隆 昌

Greek culture in the medieval West and the relation
between Byzantium and Muslim Spain

Ryusho TAKEBE

第一章 アリストテレス革命とイスラムのギリシア文化受容

ルネサンスというと、1453年にビザンツ帝国の首都コンスタンティノーブルがオスマン・トルコに攻略される前後に、ビザンツ知識人が夥しい数のギリシア語写本をもたらした結果、長らく西ヨーロッパでは失われていたプラトンやアリストテレスらのギリシア古典文化が復活したイタリア・ルネサンスが一般的には想起されよう。しかし近年の西ヨーロッパ文化史では、ハスキンスの十二世紀ルネサンス論⁽¹⁾以降イタリア・ルネサンスは中世に幾度か断続的に起こった文芸復興の最後にして最大のものであるという認識から、西洋中世は嘗て言われたような「暗黒時代」ではなかったと再評価されるようになった。ハスキンスが提唱した十二世紀ルネサンス論は、イスラム領でアラビア語とギリシア語のバイリンガル地帯であったシチリア島と、旧ビザンツ領でギリシア語とラテン語のバイリンガル地帯であった南イタリアを制圧した結果、ノルマン・シチリア王国の首都パレルモ宮廷において三ヶ国語が飛び交い、アラビア語写本のギリシア語訳がさらにラテン語に翻訳されることによって、ラテン・ギリシア・アラブ三文化の融合が実現したというものである。嘗てはイスラム文化の西欧文化への影響はテンプル騎士団などの十字軍兵士による謂わば「戦利品」という観点から考察されてきたが、ハスキンス以降は通商関係なども視野に入れた平和的な交流の方が遥かに収穫は大きかったという評価が定説化している。

さらには十二世紀以前の中世文芸復興にも、カロリング・ルネサンス、オットー・ルネサンスといった呼称が使われるようになってきている。ルネサンスという概念を安易に使い過ぎているきらいはあるが、これらの文芸復興が程度の差こそあれ、ビザンツ帝国との文化的接点を持っていたことは事実である。ノルマン・シチリア王国も例外ではなく、国王がビザンツ征服の野望を抱く一方で、王国内に位置する南イタリアの港湾都市アマルフィやナポリはビザンツ帝国と通商関係などを通じて緊密な交流が存続していた。今日研究者が「ギリシア人のローマ帝国」と呼ぶビザンツ帝国が西ヨーロッパにとってギリシア文化の貴重な情報源であったのは自明のことである。

しかし、例外が無かったわけではない。十二世紀ルネサンスのもう一つの舞台は、レオン・カステーリア王国がレコンキスタでイスラム勢力から奪還し遷都したトレドである。そして十三世紀アリストテレス革命と呼ばれるギリシア古典研究の西ヨーロッパでの流行を可能にしたラテン語訳は、ビザンツからのギリシア語写本ではなく、十二世紀のトレドでのアラビア語訳からの

重訳活動によるものだったのである。⁽²⁾ なぜカロリング・ルネサンスやオットー・ルネサンスなどの先行する文芸復興が存在しながら、アリストテレスの翻訳は十二世紀ルネサンスを待たねばならなかったのか。そして、なぜギリシア語のオリジナル版では無くアラビア語訳ではならなかったのか。そもそも、なぜイスラム支配下においてギリシア古典のアラビア語訳写本が抱負にあったのか。これらの問題が、本稿で取り扱うテーマとなる。

第二章 西方でのビザンツ文化の受容

第一節 カロリング・ルネサンスとビザンツ文化

カロリング朝のカルル大帝の宮廷で花開いた文芸復興は、歴史家によってカロリング・ルネサンスと呼ばれている。この文芸復興活動の背景には、カルルの政治的配慮が働いていた。770年代にカルルは、フランク王国の世俗・教会双方の支配者として、聖職者であれ俗人であれ高度な読み書き能力を備えた人材の必要性に直面していた。征服の度に領土が拡大し、それと共に服属した雑多な言語の民族を統治し、また異教徒や異端のアリウス派のゲルマン諸部族にカトリックを布教するには、公用語としてのラテン語教育の必要性の高まりを自覚せざるを得なかったのである。嘗てローマ帝国の言語であり、帝国の東西分割後も第一公用語であり続けたラテン語は、ゲルマン諸王国の成立によって統一性が乱れると共に、ラテン語の本家本元のイタリア半島においてさえローマ教皇グレゴリウス一世が自分にはまともなラテン語がかけないと嘆くほど中世ラテン語は古代ラテン語の洗練さを喪失していたのである。そのためカルルはフランク王国の内外を問わず、西ヨーロッパ全体に学識に優れた人材を広く求め、教育の顧問とする一方で、知識人の学芸の切磋琢磨と一層の洗練を促したのである。カルルのもとに集った錚々たる顔ぶれは、カルル自身の文法教師でもあったピサのペトルス、カルルに滅ぼされたランゴバルド王国の歴史を著したパウルス・ディアコヌス、イベリア半島からは風刺詩人で後にオルレアン司教となるテオドルフス、アイルランドから詩人のドゥンガル、唯一フランクからサン・リキエ修道院長でカルルの娘ベルタの愛人アンギルベルト、そしてこれら西ヨーロッパ各地から集まった才能の中でも白眉といえるのが詩や教会典礼や言語理論など様々な分野で活躍したブリテン島出身のアルクィンであった。彼以外にもブリテン島出身者達は、この文芸復興に重きを占めていた。ブリテン島はヨーロッパ大陸から離れているという地理的条件のおかげで、ゲルマン人の民族大移動による被害を免れていたため、比較的ラテン語写本の保存状況が良く、ラテン古典文化が延命していたのである。アルクィンの一世代前には、尊者と讃えられた学僧ベダが令名を馳せていた。当時のフランク王国には中央集権的な首都は存在せず、文化人たちはカルルに従って各地の離宮を転々としていたが、791年にカルルはライン・モーゼル地帯のアーヘンに大規模な宮廷を建設することを決め、794年に宮廷が完成するとアーヘンがカロリング・ルネサンスの主な舞台となった。

このようにカロリング・ルネサンスはラテン語の文芸復興だったわけだが、ではギリシア古典についてはどうだったのであろうか。アルクィンなどの文化人の書簡には、「ギリシア語を知らずして、学問の極みに至ることはできない」とギリシアを学問の発祥地として絶賛しているものが多い。799年にアルクィンがカルル大帝に宛てた書簡には、「もし多くの人々が、陛下の学問への素晴らしい目的に向かって邁進するならば、新しいアテネがフランキアに生まれるかもしれません。まさしくより洗練されたアテネが。このアテネは主キリストの教えにより高貴にされ、アカデミアが学問で得た知識をことごとく凌駕します。プラトンの教えに学ぶだけのあのアテネは、その卓越と名声を自由学科によって得ていました。新しいアテネは聖霊により七倍も豊かになり、世俗の学識の達成をことごとく凌ぐのです」と、アーヘンをキリスト教のアテネと位置づけてい

る。⁽¹⁾ 翌800年のクリスマスにローマで教皇により戴冠されて皇帝となり、「西ローマ帝国」を再建したとみなされるカールであるが、政治面で追及したのがローマ帝国であるのに対して、文化面で理想とされたのはギリシア文化の都であったアテネであったということであろう。このようにギリシア文化を称揚する一方で、アルクィンを含めてカロリング・ルネサンスの担い手たちのギリシア語の能力は初歩の段階に留まっており、翻訳など到底できる水準にはなかったと評価されている。その証拠にカールの死後でも、827年に当時のビザンツ皇帝ミカエル三世が当時未だ西方に伝わっていなかったアレオパゴスの聖ディオニシオス伝の写本をカールの長男ルートヴィッヒ一世（敬虔王）に贈った記録があるが、聖デニス修道院長ヒルドゥインやヨハネス・スコツス、教皇の書記をつとめたアナスタシウス＝ビブリオテカリスが試みた翻訳は誤訳だらけの不十分なものであった。⁽²⁾

ギリシア言語能力の低さのため翻訳は無理だったが、カロリング・ルネサンスがビザンツ文化を全く受容できなかったわけではない。カロリング・ルネサンスは、六世紀中葉から約一世紀間停滞していた建築活動においても復興期とされる。カールの建設したアーヘン宮廷の王室礼拝堂は同時期の建築を代表するものだが、これはカールが征服した北イタリアのランゴバルド王国の首都ラヴェンナのサン・ヴィターレ教会を模範として建設された八角形の建物である。その原型のサン・ヴィターレは547年にユスティニアヌス帝によって建立されたものだが、同帝が首都コンスタンティノープルに537年に建立したハギア・ソフィア寺院と共に当時のビザンツ式建築の双璧と評価されているものである。またやはりアーヘンの宮廷学校の装飾の象牙の朝浮き彫りでは、十字架を担ぎ右足でライオンを左足で大蛇を踏みしめる「勝利のキリスト」と呼ばれるモチーフが描かれている。このモチーフもラヴェンナのヴェスコヴィーレ教会にある「勝利のキリスト」図の模倣であり、このモチーフはカロリング・ルネサンス芸術を代表するものでもある。⁽³⁾ アルプス以北でキリスト図像表現が最初に登場するのは八世紀半ばマインツ大聖堂の磔刑像とかなり遅いが、その顔にはヒゲがある。しかしラヴェンナの「勝利のキリスト」図は六世紀のヘレニズム的芸術の伝統から、キリストは髭のない若者の姿で描かれており、カロリング・ルネサンスではキリストの顔から髭が消える。これなどは、図像表現後進国であったフランクのビザンツに対するコンプレックスの表れとも評価できる。このようにカロリング・ルネサンスのビザンツ文化受容は教会建築とキリスト教図像に留まったのだが、同時期ビザンツは726年にビザンツ皇帝が聖画像を偶像崇拜として禁止したイコノクラスム（聖像破壊運動）によって修道院の壁画が剥ぎ取られるなどの混乱が長く続いていた。この偶像禁止令が東西教会分離の発端となったわけだが、カールが殲滅するまでランゴバルド王国が再三に渡ってローマ教皇領を侵犯していた状況で、カトリック教会は独自の図像モチーフを開発する余裕は無く、結果的にカールはビザンツ図像を手本として模倣するしかなかった。そして近年では、このフランクによる模倣がビザンツにおける図像復活の契機となったのではないかという指摘がシュペック等の研究者によってなされている。ビザンツで図像表現の再興が目覚しかったのは九世紀後半からのマケドニア・ルネサンスであるが、九世紀に本格的にビザンツ図像表現を模倣し始めたカロリング朝によって、ビザンツ人が放棄した自文化の価値を再認識すると同時に強烈な本家意識に目覚めた事がマケドニア・ルネサンスの発端であるというのが最新の研究動向なのである。⁽⁴⁾ そしてカロリング・ルネサンスに触発されたマケドニア・ルネサンスは、今度はオットー・ルネサンスという形でより本格的に西方に導入されていく。

第二節 オットー・ルネサンスとビザンツ文化

十世紀後半のオットー・ルネサンスでは、髭のあるキリストなどの図像表現、教会建築、共同

統治理念などの政治文化という風に、ビザンツ文化は様々な要素が受容された。カロリング・ルネサンスはフランク一国の現象だったが、オットー・ルネサンスではブリテン島やイベリア半島のレオン王国にまで波及した。オットー・ルネサンスはチュートン系の研究者が好んで使いたがる用語であるが、ビザンツ文化が流布した範囲を考えると名称再考の余地があろう。また一例を挙げれば、それまでアルプス以北では図像表現の対象となることは稀だった聖母マリアが聖母子像や聖母被昇天図などのビザンツ・モチーフが聖母崇拜の大流行という現象と相まって、カロリング・ルネサンスが持っていた宮廷文化という限定的性格を越えて普及したのも特徴の一つである。それら全てを本稿で網羅的に扱うのは分量的に不可能なので、ここではギリシア語写本の翻訳活動にテーマを限定したい。

ギリシア語写本の翻訳の中心地となったのはナポリであるが、アマルフィーやサレルノなども含めて南イタリアで専ら翻訳活動が行われていた。南イタリアの場合当時のカラブリア地方はギリシア系住民が多数派を占めており、現在でもギリシア語を第一公用語としている地域もあるほどギリシア語の伝統が息づいている。またビザンツの南イタリア支配の中枢部はラテン・ランゴバルド人口が多数派を占めるアプリア地方であった点から、バイリンガルな人々が多かったと推測されている。九世紀後半にランゴバルド法がこの地において初めてギリシア語に翻訳されたという事実は、高度な法律の知識とラテン語ギリシア語双方の能力を有した人材の存在を裏付けている。⁽⁵⁾ またナポリ等のカンパニア地方でもギリシア語は未だ死語とはなっていなかった。北部・中部イタリアについても、コンスタンティノープルに二度赴いたクレモナのリュートプラントのように、教皇使節・皇帝使節としてギリシア語技能の持ち主は不可欠という事情から、特殊技能としてはあるがギリシア語は存続していた。これに対してアルプス以北でのギリシア語学習においては、オットー一世の弟ブルーノや姪のハトヴィック等、皇族や貴族による学習例が初めて現れる。テオファノの婚資と思われるギリシア語の福音書や詩篇をローマ字に音写したものや、ギリシア語文法書のラテン語訳、ローマ字のギリシア語単語帳が発見されているし、同時にテオファノや随員用と思われるラテン語の聖書をギリシア文字に音写したものも発見されている。ただこのような単語帳などで、効率的な語学学習ができたかは大いに疑問視されている。⁽⁶⁾ 実際テオファノがオットー三世のギリシア語教師として選んだのは、南イタリア出身のギリシア人で後に対立教皇ヨハネス十六世となるヨハネス＝フィラガトゥスであった。このような状況を見ると、ギリシア語教育活動においてもやはりバイリンガル地帯である南イタリア出身者が最適と認識されていたことが判る。

翻訳活動の主な舞台は南イタリアのナポリであり且オットー朝の事業として行われたわけではない点もオットー・ルネサンスという用語の不適格さを示すと思われるが、翻訳を活性化させたのはアマルフィーを中心としたイタリア商人のギリシア語写本の輸入であり、古代末期に表された聖ニコラオス伝やマケドニア朝期の同時代聖人の聖ヨセホス伝などのビザンツ聖者伝の多くが初めて翻訳された。マケドニア朝期はビザンツにおける聖者伝執筆の第二黄金期とされるが、その特徴としては執筆者の名前が判っている事と、彼らが首都知識人であるという点にある。第二の特徴として、新しく書かれた同時代聖者伝の奇跡に初期聖人が関わっている点がある。ヒュムノグラファー（賛美歌作曲家）の聖ヨセホス伝ではアラブ人の捕虜となっているヨセホスの夢枕に聖ニコラオスとおぼしき人物が立った翌日にヨセホスが釈放されるという内容になっており、同時代聖者と初期聖者との絆が強調されている。これは図像表現の復興がイコノクラスムの空白を埋めるのを意図したように、同時代聖者伝により初期キリスト教時代との連続性を主張する目的があったという指摘がなされている。⁽⁷⁾ 事実聖者伝作家である首都知識人は宮廷に深く関わっている人物ばかりであり、彼らの執筆動機は皇帝の意を受けた政策色が濃厚である。ビザンツで

の古代末期聖人に対する人気が同時代聖人の人気を凌駕していた証拠として、マケドニア朝期に製作され現存する千冊を越える写本の大部分は初期キリスト教聖者伝である点が指摘されている。⁽⁸⁾ 特に人気を博したのが聖ニコラオスであり、マケドニア朝初代皇帝バシレイオス一世は880年に建設した宮殿礼拝堂を聖母マリアと大天使ガブリエルと預言者エリアと聖ニコラオスに献堂しており、二代目のレオン六世は聖ニコラオスを讃える頌詩を執筆するなど、初期キリスト教聖人崇拜は皇帝主導という色彩が強い。⁽⁹⁾

聖者伝以外の翻訳としては、後に中世西欧に広く流布したアレクサンドロス＝ロマンスの初のラテン語訳も同時期に成立している。同ロマンスは古代のマケドニア王アレクサンドロスを主人公としているが、世界の果てでエデンの園を発見して入ろうとするが大天使ミカエルに諭されて引き返すというように多分にキリスト教的内容となっており、中世キリスト教文学では地上の楽園を求めて世界の果てまで旅行する修道士の物語が多数著されたが、その原点と言うべき性格のものである。十世紀後半にはアマルフィの修道院がアトス山に建設されていた事が知られているが、ここでもレオによる『聖ミカエルの奇跡譚』等の翻訳活動の実例が確認されている。⁽¹⁰⁾ またサレルノ医学は従来イスラム医学の影響が重視されてきたが、ブラウニングの研究によりサレルノはビザンツ医学書の写本と翻訳の中心地でもあった事が立証されている。⁽¹¹⁾ 以上からすると、医学書のような実用書を除けば、翻訳活動はギリシア古典ではなくキリスト教関係の書籍であることが判るが、なぜ翻訳活動の対象がキリスト教関係の写本であったのかという疑問が出てくる。

ナポリを中心として聖者伝が翻訳された十世紀は、カンパニアにおける修道院刷新の時期と合致している。九世紀にはカンパニアの修道院長への就任はコネで行われていたのに対して、十世紀にはコネで修道院長になる例は根絶されていたという。⁽¹²⁾ この修道院改革と聖者伝翻訳の動機との間には共通する心性を認める事ができよう。つまり当時のカンパニアでは、キリスト教徒のあるべき姿を初期キリスト教聖人に求めるという原点回帰の機運が高まっていたと考える事ができる。つまり同時期にギリシア古典の写本の入手と翻訳可能な状況にも関わらず翻訳がなされなかったことは、当時の西欧人の好奇心は専らキリスト教にあったことに起因しているのである。そして十二世紀になるとビザンツから輸入される写本は、オリゲネスを頂点とするギリシア教父神学に関する書籍が増加する。⁽¹³⁾ キリスト教公認後を扱った聖者伝から公認前のキリスト教神学への移行は、西欧人のキリスト教に対する知的好奇心が深まると共に時代的に遡って行ったことを示している。そしてオリゲネス神学がキリスト教とギリシア哲学とを融合すべく、ギリシア修辞学の弁証法を神学に応用したものであることを考えると、アリストテレスなどのギリシア哲学に対する西欧人の興味はキリスト教を遡ることによって喚起されたと考えることができる。

第三章 イスラムによるビザンツ文化の受容

第一節 アッバース朝のギリシア古典翻訳活動

前章ではビザンツ文化の西方での受容について見てきたが、本章ではイスラムのビザンツ文化受容について考察する。発信源であるマケドニア・ルネサンス期のビザンツ知識人は、異教時代のギリシアを軽蔑する一方で、ギリシア古典文化を先祖の遺産として賞揚するという一見矛盾した感情を持っていた。この二つの感情が違和感なく同居しているのがビザンツ人独特の思考構造であるという事が長らく言われてきたが、この矛盾をビザンツ人の内的なものとしてではなく、外的要因によるものとして理解しようというのが近年の傾向である。シュベックの考察では、前章のフランクの場合と同様に、九世紀にイスラムがビザンツ文化を積極的に受容したことに対す

るビザンツ側の反作用がマケドニア・ルネサンスのギリシア古典復興の原動力であるとする。⁽¹⁾つまりビザンツ人が七世紀頃には非キリスト教文化と蔑んでいたギリシア古典のアッバース朝での翻訳活動が、ビザンツ人のギリシア古典文化の再評価を促すと共に強烈な本家意識を覚醒させたというのである。

サラセン帝国の領土の内現在のモロッコからシリアにかけての広大な領土は旧ビザンツ領であり、そのためイスラムはその初期からギリシア語能力のある膨大な人口を有することとなった。またウマイヤ朝はビザンツ統治制度をその官僚ごと引き継いだため、官僚養成のマニュアルはギリシア語であった。この状況からウマイヤ朝でも実用書については若干の翻訳はなされたが、ギリシア古典文化の翻訳には至らなかった。それはウマイヤ朝に取って代わったアッバース朝を待たねばならなかった。

アッバース朝によるギリシア古典の翻訳活動は八世紀半ばにアル＝マンスールの要望によりコンスタンティノス五世がユークリッドの写本等を贈与したのが発端とされている。主に新首都バグダードの「知恵の館」と呼ばれた研究機関で行われた翻訳活動は、約二世紀に渡ってカリフは勿論当時の社会的エリート層によって支援されたものであり、公私両面から膨大な資金援助がなされた。幾世代にも渡ってアッバース朝の社会観や大衆文化を反映し持続的な計画に基づき、厳格なまでの学問的方法論と厳密なまでの文献学的精密さをもって行われ、イスラム文明の基礎が築かれたと評価されてきた。ところで、ムハンマドから数世代しか経ていないアラブ人カリフ達は何ゆえギリシア古典文化の翻訳に熱を上げたのか。イスラム以前のアラブ人キリスト教国家であったガッサーン朝がビザンツ人と同様に異教のギリシア古典文化を軽蔑していたことを思うと、アッバース朝の特異な精神風土が際立って来る。この問題に対してグタスは、バグダードという立地条件を指摘している。彼によると、ウマイヤ朝の首都ダマスクスは旧ビザンツ領シリアにあったため、ギリシア古典に対する蔑視が根付いていた。これに対してバグダードは旧ササン朝ペルシア領に新設され、シルク・ロード貿易上唐の長安と並ぶ二大国際都市として多文化社会が成立したため、ギリシア古典に対する嫌悪感とは無縁であったという。皮肉にも非ギリシア語話者地域への遷都が、ビザンツが蔑視したギリシア古典文化を保存するという逆説的結果を招いたとグタスは主張しているのである。⁽²⁾では、アッバース朝がギリシア古典に着目した理由は何であろうか。マフディーはアリストテレスの『トピカ』翻訳を命じたが、その意図は異教徒間神学論争における弁証法的手引書という、言わば敵の武器で敵を制するという点にあったとグタスは指摘している。⁽³⁾キリスト教はローマ帝国での迫害時に異教知識人からしばしば誹謗を受けたため、これに反論する「教父」と呼ばれる護教家が輩出し、その後は異端論争も加わったためキリスト教神学は理論的に深まっていったという歴史を持っている。そのためキリスト教知識人は、新興のイスラム教にとって理知的な難敵であった。カリフはイスラム教の教主であるから、イスラム教の論争における弱体は権力に関わる深刻な問題でもあった。そして教父神学の基盤は、その論争相手がギリシア古典教養に根ざした異教哲学者であったため、対抗上ギリシア修辞学の弁証法によらざるを得なかった。アッバース朝の歴代カリフは、キリスト教神学の真髓がギリシア修辞学にあることを正確に見抜いていたのである。また論争に長けていることは外交上も重要であったし、弁証法はイスラム法学の発展にも寄与した。

九世紀後半のマームーン期には、親ギリシア・反ビザンツ・反キリスト教的言説が登場する。それは、ギリシア文化を蔑ろにするビザンツ人とギリシア文化を受容したムスリムとを対比する事で、非合理的なキリスト教に対するイスラム教の合理性という形で自らの優越性を謳い、同時にギリシア文化の正統継承者はビザンツ人ではなくアラブ人だという主張に辿り着く。そしてローマ（ビザンツ人）は、ギリシア文化を蔑ろにしているが故に、先祖の古代ギリシア人よりも

劣っている。さらには、ビザンツ人はギリシア人ではないとする言説すら出現する。870年頃没したとされる著名な哲学者キンディーは、古代ギリシア人の祖ユーナーンがアラブ人の祖先であるカフターンと兄弟になる系図を考え出した。この考えによると、古代ギリシアの学問はアラブに起源を持ち、翻訳活動は本来の所有者にギリシア文化を還した物だという論法となる。そしてアッバース朝こそがギリシア文化の正統継承者であり、ビザンツは既に文化的には消滅しており、後は政治的滅亡を待つだけである。このようにして翻訳活動は、異宗教との神学論争の弁証法マニュアルから、対ビザンツ軍事キャンペーンへと発展を遂げて行ったというのがグタスの主張である。⁽⁴⁾

このようなイスラムの動きに対して、ビザンツではマケドニア朝の前のアモリア朝期からアッバース朝への使節には高度な古典教養を有する世俗知識人を派遣し、イスラム知識人との問答でイスラム側を感服させるという外交方針を採っていた。⁽⁵⁾ このような人材は勿論ギリシア古典の復活なくしてはありえないし、人材育成には古典作品の写本の増産が不可欠である。注目すべきはアッバース朝の翻訳運動と時期を同じくして、ギリシア語写本はアンシャル体（大文字）から小文字に使用が一般化したことである。大文字と小文字の写本の違いは、一つのページの文字数の量の増加と写本の縮小という二重の利便さを持っていた。イスラム側の史料には、カリフや学者がビザンツにギリシア語写本を求める使節を派遣した記述が豊富にある。ビザンツでの小文字の普及は、写本の国外での需要の増大に起因するのかもしれない。事実、財政上写本は利益の多い事業であったという指摘もある。⁽⁶⁾ ともかく約150年の空白の後、ビザンツでは写本に対する関心が復活すると同時に、古典研究に対する情熱も復活した。七世紀前半にヘラクレイオス帝により禁止された天文学が、イスラム天文学の業績と競おうという願望が刺激となって九世紀に復活したのはその好例と言える。⁽⁷⁾ アッバース朝という写本の顧客とイスラムのギリシア熱が、ビザンツに経済的理由と学問的競争心、さらには外交上の思惑からギリシア古典の復活という現象を生んだのである。マケドニア朝期には宝石や貴金属で装丁した写本は絹と並んでビザンツ外交上の重要アイテムとなるが、その際皇帝はフランクにはキリスト教関連書、イスラムには古典作品と使い分け、どちらもビザンツが本家であるという姿勢を誇示した。

第二節 後ウマイヤ朝とビザンツの友好関係

十三世紀に西ヨーロッパでアリストテレス革命と呼ばれるギリシア古典研究が盛んになった背景には、十二世紀にクレモナのゲラルドゥス等のトレドにおける翻訳グループがアラビア語をラテン語訳するという御膳立てがあったればこそである。ゲラルドゥスは1162年前にはイベリア半島へ赴きカスティーリア王国のトレド大司教座聖堂参事会所属の聖職者のかたわら翻訳活動に携わり、1187年に没するまで71点以上のアラビア語文献をラテン語に翻訳した。彼が翻訳活動に携わる契機は、ラテン世界に残存していなかったプトレマイオスの『天文学集成（アルmageスト）』がトレドで入手できるという話を聞いてトレドに赴いた。トレドにおいて彼はイスラム世界の学術水準の高さと知識の豊富さに圧倒される一方で、ラテン・キリスト教世界の学問の貧弱さを痛感した。そしてアラビア語文献の翻訳によって、その知識をラテン世界に知らしめんと決意したという。その翻訳活動の際に彼が意図したのは、アリストテレスの学術体系とそれに付随する著作を包括的に紹介することだったと推定されている。アルフォンソ六世は講和条約によりトレドを無血開城し、「三宗教の王」と称してイスラム教徒やユダヤ教徒に信仰・生命・財産を保証するという宥和政策を採ったため、1031年の後ウマイヤ朝滅亡後ドン・ヌーン朝統治下で栄えた学術活動は阻害されず、レコンキスタ後も学問の中心地として名声を博したのである。⁽⁸⁾

このようにギリシア語古典作品の写本が豊富なイベリア半島ではあるが、十世紀の半ばの時点

では、ギリシア語を読解できる人材が存在しなかったことが知られている。前述のようにサラセン帝国の初期の征服地のうち、現在のシリアからモロッコまではビザンツ帝国領であったため第一公用語はギリシア語であったが、イベリア半島は西ゴート王国であったため征服民は元来ギリシア語に堪能でなかったという事情もあろう。またアッバース朝と敵対していたため、イスラム世界では長年孤立した状況にあり、翻訳活動などのギリシア文化との接点もなかったらしい。近隣のシチリアや北アフリカは言語的にはアラビア語が第一公用語化していたものの、九～十世紀にはビザンツ領南イタリアを略奪する一方でナポリやアマルフィーなどカンパニア都市とは通商関係などがあるため、外交折衝や商談はおそらくギリシア語で行われたと推定されている。⁽⁹⁾ さらに後ウマイヤ朝は、アッバース朝瓦壊後にシチリア・北アフリカに成立したファーティマ朝とも新たな敵対関係に入ったため、イスラム内でのギリシア文化興隆とは無縁の存在であり続けた。

その後ウマイヤ朝とギリシア文化との接点ができしたのは、同王朝最盛期のカリフとされるアブド・アッラフマーン三世が、946もしくは947年にビザンツに対シチリア艦隊の共同作戦を打診してきたことによる。941年にビザンツ艦隊は第二回プロヴァンス遠征を行い、同地のフラクシネトゥムに拠点を置きイタリアのモンペティエ地方からアルプス山中まで略奪の射程を広げていたムスリム・スペイン系匪賊勢力を攻撃し海賊拠点一つリビエラを陥落させた。⁽¹⁰⁾ フラクシネトゥム本体の完全制圧とはならなかったが、これがビザンツ海軍力に対するアッラフマーン三世の関心を喚起したらしい。実際には軍事作戦は956年など計三回しか実現しなかったが、ビザンツと後ウマイヤ朝との友好関係は973年にフラクシネトゥムをビザンツが陥落させた後も続き、外交使節の相互の派遣は1031年の後ウマイヤ朝滅亡まで繰り返され、結果的には文化交流の方で成果を挙げたと言える。ちなみにシガール等はオットー・ルネサンスについて、970年代からのビザンツ人と西方との人的交流の背景にテオファノの存在を自明の大前提のようにしているが、⁽¹¹⁾ 一皇女の結婚と人的交流の活性化を結び付けるのには無理がある。むしろテオファノとオットー二世との結婚の翌973年に、このアラブ海賊の巣窟フラクシネトゥムがビザンツの第三回プロヴァンス遠征軍とフランク軍の共同作戦で陥落した事で人的交流の阻害要因が消滅した点を指摘しておきたい。では、具体的にどのような文化交流があったのか。

アッラフマーン三世の呼びかけに応じて、948年にコンスタンティノス七世が返礼の使節を送った際の贈り物の中にはディオスコリデスの *Materia Medica* (『薬物誌』) があった。クレモナのリュートプラントはヴェネツィアで帰路にあるこの使節団と遭遇し、サロモンという宦官が団長であったと伝えている。⁽¹²⁾ 前述のようにイベリア半島にはギリシア語に堪能な人材がいないため、同書を翻訳するためアッラフマーンはビザンツに学識者の派遣を要請した。要請に応じて二年後にニコラオスという修道士が派遣され、共同で翻訳が完成したという話がある。ビザンツは捕虜にしたアラブ兵を対スラブ戦線に投入するなど国内にアラブ人を有し、キリスト教に改宗すれば平等に遇しており、マケドニア朝二代目のレオン六世の側近サモナスもアラブ人であったようにアラビア語に堪能な人材は豊富だったのである。翻訳はニコラオスをリーダーとしたチームの共同で行われ、二人の著名な人物に補佐されていた。一人はシチリア出身の医師でギリシア語と薬学知識の両面を備えたアブー・アブダラー、もう一人はカリフの重臣の一人であるユダヤ人ハスダイ・イブン・シャブルートであった。翻訳完成後もニコラオスは帰国せず、その後数十年に渡ってコルドバに留まり、現地でのギリシア語教育に貢献した後に現地で没した。写本以外では、1031年の後ウマイヤ朝の滅亡時にベルベル人の略奪にあって現存しないが、アッラフマーン三世のコルドバ郊外の夏の離宮メディナ・アル・ザーラの装飾のために140本の大理石の柱がビザンツから贈呈された。965年には当時のカリフであったアル・カハムがコルドバのモスクをモザイクで飾ろうと、ビザンツにモザイク職人の派遣を要請し、同年多くの職人達がコルドバに

到着したことが知られている。970年代の初頭にも、ビザンツ皇帝が約1600キロのモザイクのキューブを送ってきた記録がある。⁽¹³⁾

残念ながら、ゲラルドゥスが翻訳を試みたアリストテレスの著作が、イベリア半島で翻訳されたものなのか、アッバース朝で翻訳されたものが輸入されたのかを史料から知ることはできない。十世紀後半には南イタリアのアマルフィーの商人がエジプト・シリアやイベリア半島を往来しており、イスラム間の政治的対立関係をよそに通商関係が深まっていたのである。また、十字軍時代には戦乱を逃れてイベリア半島に移住する人々が急増していく。写本はビザンツの外交上の必須アイテムであり、イスラム向けにはギリシア古典を贈るのがビザンツ外交の常套であること、ギリシア語学校が存在したことからそれなりの翻訳活動を想定することはできる。しかし確実性を求めるなら、アッバース朝の翻訳本とスペインで発見されたアラビア語訳とを見比べて差異を確認する必要があるが、残念ながらそのような研究は今のところ不在である。ただ確実に言えることは、長年ギリシア語と無縁であったイベリア半島にギリシア古典文化への学問的関心を惹起させたのは間違いなくビザンツとの交流である。ゲラルドゥスを魅了したトレドの写本が、後ウマイヤ朝のオリジナルな翻訳かアッバース朝で翻訳されたものの輸入かに関係なく、後ウマイヤ朝期にムスリム・スペインでギリシア古典に対する関心が芽生えなければ、彼の翻訳活動は不可能であったし、アリストテレス革命も起きようがなかったのは言うまでもない。

第四章 まとめ

本稿では、ギリシア古典文化と初期キリスト教文化の双方を有するビザンツ帝国が、西欧とイスラム与えた文化的役割について概観してきた。そして、異教文化として嫌悪されていたギリシア古典文化と、聖画像破壊運動で葬られそうになった初期キリスト教文化が、マケドニア・ルネサンスのもとで復活したのは、カロリング朝が初期キリスト教文化を受容し、アッバース朝がギリシア古典文化を受容したことに対する反作用であるとする近年の研究動向を確認した。

さらにはイスラムにはギリシア古典文化、フランクには初期キリスト教文化を誘示するというビザンツ帝国の外交方針が、西欧ではオットー・ルネサンスと呼ばれる図像の模倣や聖者伝翻訳という文化現象を生み、後ウマイヤ朝ではギリシア古典文化に対する関心を喚起した点を指摘した。そして、やがて西欧人が初期キリスト教神学の真髄はギリシア古典にあることを悟った時に、その向学心を満足させるギリシア古典文化についての情報を提供したのは後ウマイヤ朝滅亡後のイベリア半島のアラビア語訳であった。以上を総合すると十世紀後半のビザンツ帝国は、悠長ではあれ西欧人にギリシア古典研究の動機付けを行い、イベリア半島にそのアラビア語訳が集まる動機付けも行ったという点で、アリストテレス革命の需要と供給の両面において御膳立てを行ったと言って良いであろう。

最後になぜ、ゲラルドゥスが直接ビザンツにギリシア語写本を求めなかったかについて述べておこう。十二・十三世紀は十字軍の時代であり、その動きの中でビザンツとヴェネツィアなどの西欧人との軋轢が深刻化していった。結局第四回十字軍が1204年にコンスタンティノープルを占領してラテン帝国を樹立すると、ビザンツ文化人はビザンツ人が築いたニケーア帝国に亡命してしまう。またニケーア帝国はコンスタンティノープル奪還を至上命題とする軍事国家であったから、この国是の下ではビザンツ人による目立った文化活動がなかったのは当然と言える。つまり、西欧は自らギリシア語オリジナルの文化伝達経路を断ってしまったわけであり、そしてオリジナルの穴を埋めたのがアラビア語訳であったのであり、そのアラビア語文献をイベリア半島に誘う契機となったのが十世紀半ばのビザンツから後ウマイヤ朝へのギリシア古典写本の贈与と共同翻訳事業であったのである。

註

第一章

- (1) Ch. H. ハスキンス著, 野口洋二訳, 『十二世紀ルネサンス』, 創文社 (1985)。
- (2) 熊倉庸介, 「クレモナのゲラルドゥスとアリストテレス」, 『歴史学研究』(歴史学研究会編) 807号, p.170~180。

第二章

- (1) Alcvin, *epistorae, Monumenta Germaniae Historica, Epistorae IV, Epistorae Karolini Aevi II*, Munchen (1994) S.279. 本翻訳は, 佐藤彰一, 池上俊一著『世界の歴史10 西ヨーロッパ世界の形成』中央公論社 (1997), p.140より引用。
- (2) Wickham, C., *Ninth-century Byzantium through western eyes*, ed. by L.Brubaker, *Byzantium in the Ninth Century, Dead or Alive*. Newcastle (1996) p.248f. (以下 *Dead or Alive* と略記)
- (3) Timmers, J.J.M., *Byzantine influences on architecture and other art forms in the Low Countries with particular reference to the region of the Meuse*, ed. V.D. van Alst and K.N. Ciggaar, *Byzantium and the Low Countries in the Tenth Century; Aspect of Art and History in the Ottonian Era*. Amsterdam (1985) p.128f.
- (4) Speck, P., *Byzantium: cultural suicide? Dead or Alive*, p.80.
- (5) Kreutz, B.M., *Before the Normans; Southern Italy in the Ninth and Tenth Centuries*, Philadelphia (1991) p.139.
- (6) McKitterick, R., *Ottonian intellectual culture in the tenth century and the role of Theophano*, ed. by A.Davis, *The empress Theophano; Byzantium and the West at the first millennium*, New York (1995) p.175f., p.182. (以下 *The empress* と略記)
- (7) Hogel, C., *Hagiography under the Macedonians: the two receptions of the metaphratic Menologion*, ed. Magdalino, P., *Byzantium in the Year 1000*, Leiden (2003) p.216.
- (8) *Ibid.*, p.217.
- (9) Sevckenko, N.P., *Canon and calendar: the role of a ninth-century hymnographer in shaping the celebration of the saints*, *Dead or Alive*, p.110.
- (10) Ciggaar, K.N., *Wester Travellers to Constantinople: The West and Byzantium, 962-1204*, New York (1996) p.277f. (以下 *Travellers* と略記)
- (11) Browning, R., *Greek influence on Salerno school of medicine*, *Byzantium and Europe*, Athen (1987) pp.189-194.
- (12) Kreutz, *op.cit.*, p.127f.
- (13) Ciggaar, *Travellers*, p.90.

第三章

- (1) Speck, *op.cit.*, p.80.
- (2) ディミトリ・グタス著, 山本啓二訳, 『ギリシア思想とアラビア文化 初期アッバース朝の翻訳運動』, 勁草書房 (2002), p.4~5, p.21~22。
- (3) 同書, p.75~76。
- (4) 同書, p.95~105。

- (5) Speck, *op.cit.*, p.81f.
- (6) グタス, 前掲書, p.197, p.202, p.206。
- (7) Pingree, Greek Influence on Early Islamic Mathematical Astronomy, p.33.
グタス, 前掲書, p.207。
- (8) 熊倉, 前掲論文, p.170。
- (9) Kreutz, *op.cit.*, p.139.
- (10) Liudprandi episcopo Cremonensis, *Antapodosis*, ed. J.Becker, *Opera, Monumenta Germaniae Historica Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum*, VII, Hannover (1915) S.134-135.
- (11) Ciggaar, K.N., Theophano: an empress reconsidered, *The empress*, pp.49-63.
- (12) Liudprandi episcopo Cremonensis, *op.cit.*, S.486-7.
- (13) Ciggaar, *Travellers*, p.300. Wasserstein, D., Byzantium and al-Andalus, *Mediterranean Historical Review*, Vol.2, Number 1 (1987) p.84.